

| | |
|---------------|---|
| Title | 小説における会話（9）：Le Père Goriotを中心に、 小説の会話と劇の会話 |
| Author(s) | 赤木, 富美子 |
| Citation | 大阪外国語大学論集. 6 p.135-p.159 |
| Issue Date | 1991-12-15 |
| oaire:version | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/79553 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

小説における会話(9)

— *Le Père Goriot* を中心に、小説の会話と劇の会話 —

赤木 富美子

先にバルザックの小説において会話、とくに大勢の人の集まりで交わされる会話の、巧みさの分析を試みた。こうした集団場面の会話の魅力の一端が、(1) 会話場面の^{ドラマチック}劇的な構成にあること、(2) その場のドラマ性を読者が捉えうる前提として、場面に放射線状に集中された背後の状況の読み取りが重要な意味をもってくること、そして(3) 以上の二つの要素は、神に類する視点を読者に与えるという意味において、バルザックの小説作法と密接に関わっていること、を不完全ながら図式化した⁽¹⁾。

だが、考えてみると、小説において集団場面の会話が、これほど魅力に富み、しかもその魅力の構成要素が、ドラマ性にあると結論されたのであれば、前回の小論は、奇妙な疑問を起こさせる。それならば何故、バルザックは、劇作家として、失敗したのであろうか? ……と。無論、劇作品の成功を決定する要素は様々あり、今ここでバルザックの劇作品を新たに研究して、既出の成果に何か決定的なことを付け加える自信も意図もない。ただ、小論では、この意外な事実を手掛かりにして、小説における会話の性質を、少しでも明らかにしたいと思うのである。もしかしたら小説の会話を魅力あるものにする条件と、劇作品のそれとは、本来異なるものなのではないか? 小説の集団場面の優れた会話を、そのまま舞台にのせても、優れた劇にはならないのではないか? バルザックは、このことをよく理解していなかった為に、小説においてほど、魅力のある会話場面を舞台に再現出来なかったのではないのか? 等々の解答を想定することもできるだろう。これは、さしあたって次の問題に集約されることになる。

小説の会話場面の面白さを成り立たせているものは劇とは違って何なのか?

これらの疑問に導かれて、今回は、*Le Père Goriot* を中心に、会話場面の面白さを更に詳しく検討してみたい⁽²⁾。特に、バルザックは、小説においても、場面々々を思い描き、それを後でグループにする、と言われている⁽³⁾。そうした場面のひとつを取り上げ、章を始めることにしたい。無論、はじめに劇とは何かという定義をすれば、論述は簡単になる。しかし、その簡単、明晰さは、深く、限らない事実と引き換えにしか得られない。いまは、むしろ劇とは何か、小説の会話場面とは何か、を求めつつ、具体的にテキストを味わっていくのであるから、この相違が

明らかになった小論の終わりに、はじめて定義に近いものが得られれば、幸いであるといった態度で解明にとりかかりたいと考える。

さて、『ゴリオ爺さん』を最初に選んだ理由は、Maison de Vauquer の下宿人たちの会話場面の面白さが心を離れなかったのが、第一であるが、幸運にも、そのひとり Vautrin を主題にした劇が、同じ作家によって書かれ、上演されている⁽⁴⁾。この劇にはまた Eugène de Rastignac 或は、Lucien de Rubempré と覚しき人物も登場するので、大変好都合に思われる。そこで、随時、この劇に言及しながら『ゴリオ爺さん』の会話場面を読み進んでみよう。ところで、この劇『ヴォートラン』*Vautrin* の書かれたのは、1839—1840年であり、『幻滅』の第二部と第三部の間に当る。Vautrin という強烈な作中人物が、その十分な叙述の頁数を獲得するのは『幻滅』の第三部以降に当たることから、これらの小説と、劇『ヴォートラン』の場合、小説から劇への影響だけでなく、劇から小説への影響もなおざりに出来ないものがあると、René Guise は、主張している⁽⁵⁾。

このことは、小論において、劇を参照する場合に、心にとめるべき事柄であると考えるが、それは、第二章で付随的に検討の対象にしたいと考える。

第一章 『ゴリオ爺さん』 p.55—60を中心に。

まず、この作品の一番最初の集団の会話、ヴォーケールの下宿人たちの昼の食卓の場面を取りあげよう。便宜上、劇の用語を借用するならば、ここは古典劇でいう Exposition の場である。登場人物が紹介され、その性格、そのシチュエーション、人物間の係わり合い、などが無理なく、観客に報らされる場面である。古典劇では、この場は、「完全で短く、明瞭で、しかも観客の興味をひき、自然らしいこと」が要求される⁽⁶⁾。バルザックが、小説では、如何に巧みにこれらの要求を満たしているかを、—— しかも、そのまま舞台に移したのでは、優れた劇になり得ない方法で満たしているかを—— 観察してゆくことにする。このように、劇の用語や、劇との関連を念頭においた解明の方法をとることによって、おそらく、小説における会話の特質が浮かびあがってくるものと思われる。なお、素材として、小説の場面を取りあげるので、厳密に直接話法だけの研究に限定されないことをお断りしておく。因にバルザックは、「この暗く、恐ろしい悲劇の Exposition の場は、ここに終わる」（『ゴリオ爺さん』より）という風に、劇の用語を好んで小説に当てはめている。（Th.24,XXVI）

I、人物提示の機能

「完全な Exposition とは、次のようなことを観客に告げねばならない。主題と主な状況、場面は何処かということ、更には、アクションの始まる時間、主要人物の名や身分……」(La dramaturgie classique)⁽⁷⁾。

1, 他の人物による提示

劇では、最も難しい技法のひとつとされている、人物の紹介を、小説は、地の文という簡単な方法で、くぐり抜けることができるし、事実バルザックは、はじめは、それを駆使して人物を描写している。ヴォーケール夫人の前歴の長い長い物語をはじめ、すべての作中人物について、適当な頁が、割かれている。しかし、ここでもバルザックは、劇でも用いる方法を知らなかったわけではないことを証明している。つまり、前稿でもとりあげた *Avant scène* の方法である。Vautrin は、この小説ではじめて姿を現すのだが、彼が食卓の会話で、その個性的な声を聞かせる前に、女中のシルヴィと下男のクリストフの間で、次のようなやりとりがある。

「シルヴィ」と、一番目の焙り肉にたれをつけながら、クリストフが言う。「まあ、ヴォートランさんは、いい人だが、夕べも二人の男と会ってたぜ。おかみさんが気にしても黙っていません」

「あんた、あの人から何かもらったね。」

「黙ってろよ、って感じで月に百スーくれるんだ」 (p.48) ⁽⁸⁾

こうして暫くヴォートランの胡散くささや、下宿人の噂が、やりとりされる。状況は自然であるし、会話は生き生きしている。

ところが、劇『ヴォートラン』の冒頭部分では、こうした巧みさは、すこしも活かされていない。

公爵夫人「待っていて下さったのね。なんてご親切な。」

ヴォロドレ嬢 (伯母)「どうしたの、ルーズ。十二年このかた、いつも一緒に涙にくれていて、うれしそうな貴女を見るのは初めてだわ。貴女を知っている者にとっては不安なことよ。」

(一幕一場) (*Vautrin* II, p.135) ⁽⁹⁾

この奇妙な台詞は、「私はオレストだ。いつも不幸につきまわられて…」⁽¹⁰⁾というのと余り変わらない。とくに、登場人物が話相手の既に知っている筈のことを、述べるのは悪い *Exposition* の見本とされている。(p.57) ⁽¹¹⁾

この違いは、何に由来するのだろうか？ このことについて少し考えてみよう。

小説の *Exposition* に先立つ下宿人の噂の場を、もし、舞台上で演じた場合、まずその内容が煩雑で、これを耳から受け入れる観客は、とても耐えられないであろう。チップのはずみ方まで問題になっている上、噂にのぼる下宿人は、ヴォートランの他、ゴリオ爺さん、クチュール夫人とその姪、ミショノー、ボワレ、等々と五指に余る。次に、この対話者、女中と下男が長時間、舞台を占領すれば、印象は、主役を凌いでしまう。『フィガロの結婚』におけるフィガロとシュザンヌになってしまうであろう。

小説では、読書の眼線を追って、細部を心に留めることができるし、対話者の姿は詳しい描写がないので、余り気にならない。バルザック流の *Avant scène* が活きるのは、まさに小説だからなのである。

2, 日常的動作の描写

さて、いま中心として取りあげている集団会話の場面の前に、ヴォートランは、単独で姿を現す。

丁度 この時小唄がきこえ、ヴォートランが太い声で口ずさみながら、サロンに入ってきた。「ながらく世界を股にかけ、あらゆるところに現れつ……やぁ ヴォーケールかぁさん、おはよう。」と彼は、女主人を認めると、愛想よく彼女を抱いて言った。

「もう！ おやめったら！」

「厚かましい！ でしょ？ と彼は言い返す。さぁ そう言ってよ。言ってくださいよ。ほらほら、お膳立てをお手伝いしましょ。親切でしょうか？」（p.51-52）⁽¹²⁾

太っちょの、おかみの腰に手をまわすのは、なかなか大変で、ヴォートランぐらいにしか出来ない、と読者は、既に知らされているので（p.23）、この情景は、目に浮かぶようによくわかる。このように、現実によく世間を渡り歩いてきたヴォートランを、これ程よく捉えた描写の会話も、さてこれを舞台で演じるとすると、余りに日常的で、余りに細部に亘り過ぎて劇全体の構成を破壊するだろうということは、納得出来る。

だが、この細部を持たないヴォートランは、劇『ヴォートラン』では「ヴォートラン、黒づくめの衣装で」（二幕十三場）、「ヴォートラン、白メルトンの足つきズボンに同じ布のかぶりチョッキ。赤のモロッコ革のうわばき、要するに事業家といったいでたち」（三幕二場）などという風にいろいろに派手な衣装を替えながらも、限どりをした歌舞伎役者のように、現実感を失っている。

3, 附 長い台詞について。

ヴォートランの、非現実性という点でみると、劇の三幕四場の冒頭の34行にわたる長い台詞は、おそらくバルザックの劇の失敗を決定的にする要素のひとつであったに違いない。ここでは、ヴォートランは直前の場面の自分の行為を説明し、これからの行為を述べている。そもそも、劇中人物が、自分について、このような説明をしなければならないような劇は、退屈であるが、それが、ながながと続くというのは、論外というべきだろう。一般にこのバルザックの劇では、モンソレル公爵夫人にしろ（p.145ひとりごと）、公爵にしろ（p.150,23行）、脇役 Rafouraille にしろ（p.186,21行ひとりごと）、長い台詞や独白が多すぎる。小説であれば会話のうまい作家が？と驚きを禁じ得ない。

ところで、ここで『ゴリオ爺さん』の我々の Exposition の会話に目をうつした時、ひとつの気になる会話が見つかる。p.58からp.59にわたる、実に44行の会話である。劇では、大失敗をひきおこす筈の、この長さが、何故ここでは、許容され、それどころか魅力的なのだろう。一体何がおこっているのでしょうか？

まず内容の検討から始めよう。

ここは、酸いも甘いもかみわけたヴォートランが、ぼっと出のラスティニャックに、「あんたは、まだ若すぎて、パリのことは、よく知らねえのよ。」⁽¹³⁾とパリ生活の裏の裏を講釈して聞かせる場面である。読者の興味を惹きつけてやまない上流夫人の裏話もある。その間に物語に必要な細部も語られるのではあるが、ここで読者に起こることは、重要である。つまり、読者は、しゃべっているのが、ヴォートランだということは、充分知っていながらも話の内容に引き込まれて、語り手を意識しなくなる。

このことは、話の中に挿入された、他の人物の描写の位置でも類推できる。つまり、ヴォートランの話が始まった頃、居合わす作中人物も興味津々、一座の注目が彼に集中している。この様子は、() 内で作者が巧みに描いている。(この言葉にミシュノー嬢は解ってるという様子で、ヴォートランを見た。軍馬がラッパの音を聞き分けるように。)⁽¹⁴⁾しかし徐々に、読者が話の内容にひきこまれ、語り手に注目しなくなるにつれて、このような描写は、影を消してゆく。すなわち、この部分は、直接話法でありながら、地の文と同じ機能を果たしているのである。これは、まさしく小説でしか、あり得ない現象であるかと思われる。これをそのまま、劇に流用したのは、バルザックの劇についての認識の不足だったといえる。劇では、語っている俳優の肉体を観客の意識から、消しさる事は、出来ない。

もし、劇において、これを実現するなら、ラシーヌのように、なすべきであった。テラメーヌの「語り」のように⁽¹⁵⁾。つまり、舞台の人物も観客も、声もなく聞き入るような内容であること、そしてそれは、耳から聞いて、魅了せずにはおかないような美しい響きで語られること⁽¹⁶⁾、である。それでもなお、それは、積み重ねられた約束事という支えを必要としたかも知れない。

II, 謎

「次に Exposition は真実らしく、しかも興味をひくものでなければならぬ。」(*La dramaturgie classique*)⁽¹⁷⁾

秘密を持ったらしい人物を登場させ、観客あるいは読者にその成り行きについての期待を抱かせて興味をひく、というのは、Exposition の場の大きな要素である。この観点から、『ゴリオ爺さん』をみると、すでに三つの謎が提示されていることがわかる。

1, ゴリオと貴婦人の謎。2, Victorine の運命。3, ヴォートラン自身の謎。

(この他、Poiret と Michonneau の関係も言及されている。)⁽¹⁸⁾

これほど多くの、また複雑な謎を冒頭一挙に提示するなど、劇では、とても不可能なことである。

小説の特権を駆使しつつ、バルザックが、いかに巧みにこれを提示しているかを見て行こう。

1、ゴリオ爺さんの謎。この謎は、地の文と会話を巧みに組み合わせて提示されている。

a) 作者の描写によるもの。

夜更け、はじめてラスチニャックが、爺さんの謎の行為（娘のために、金の食器を売ろうとする）を目撃する場面は地の文（p.46-47他にp.39）。爺さん自身の描写のなかで謎が提示されるのは、地の文（p.37）のなかに組込まれた会話である。

ゴリオ爺さんは、その貴婦人は、自分の姉娘だと答えた。

「じゃあ、あんた。娘が三十六人もいるってわけだね。」とヴォーケール夫人は、つっけんどんに言った。

「娘はふたりだけだよ。」破産してどんな辛いことにも従順になった人間らしく、下宿人は、おとなしく反論した⁽¹⁹⁾。

b) 他の作中人物の会話で。

ついで、これは、我々が Avant scène として前述した箇所なのであるが、下男と女中の会話で、

「あの人は大したものはいくれないんだがな、時々使いにやらされる貴婦人のところで、チップをはずんでくれるんでね。素晴らしい身なりの人だぜ。」

「娘だとか言ってる女だね。一ダースもいるんだろ。」

「ふたりだけだよ。俺が行くのは。いつもここへ来てるあの人たちだよ。」（p.49-50）⁽²⁰⁾

こうして謎を徐々に積みあげて行くことは、劇作品でも表現可能なことである。しかし、次の例は、劇では不可能なことに思われる。

（ラスチニャックが傍らにいるピアノションに耳うちして言う。）

「見てみろよ。ゴリオ爺さんが、ヴィクトリーヌ嬢をみてる様子を。」

老人は、食べるのをわすれて、じっと哀れな令嬢に見入っていた。令嬢の表情のひとつひとつに、真の苦しみが、——愛する父に、認めてもらえない子の苦しみが——はっきりと浮かび出していた。

「ねぇ君」とラスチニャックは、小声で言った。「ゴリオ爺さんのことでは、僕たち、間違っているかも知れないよ。あの人は馬鹿でもないし、無神経でもないよ。…」（p.66）⁽²¹⁾

ここは、ラスチニャックが、はじめてゴリオに興味を惹かれ、真面目に好奇心を持つ重要なとこ

ろであるが、それがゴリオの微妙な、同情の様子を観察した故であった。

このような人間の態度の精密な表現は、舞台上では、不可能である。しかも、ここには、ゴリオの表情の描写そのものではなく、読者の想像に委ねられている。小説の特権を最大限利用していると言えよう。

2, ヴィクトリーヌの謎

この不幸な私生児の運命も、やはり、この Exposition の場の大きな興味のひとつである。この類いの娘役は、劇でもよく用いられており、『ヴォートラン』では、ラウルに心を寄せる、Inès de Christoval がそれに当たる。劇では、俳優の姿かたちで、清楚な美しさも表せる。小説では、それを地の文で行っているだけである。

a) 作者の描写によるもの。

「(ヴィクトリーヌとラスチニャック) ふたつの姿が、そこでは、おおかたの下宿人や常連と強い対照をなしていた」(p.20-22)に始まり⁽²²⁾、三頁に亘る詳しい叙述がそれにあたる。

また、昼食の場として取り上げた中の、会話の合間の寸描も活用されている。

Mademoiselle Taillefer は、これから敢行することで、心が一杯で、うわの空で聞いていた。
(p.58) ⁽²³⁾

b) 他の作中人物の会話で。

前述の Avant scène で、下男が、

「ああ、みんな、ではらっちまってるよ。クチュールさんと姪御さんは、サンテチェヌ教会へ、有り難い神さまを頂きに。……」(p.49) ⁽²⁴⁾

c) 本人の会話で。

「おお！ 汚れなく、不幸にして、迫害される婦人たちよ！」とヴォートランが、横から叫んだ。「現在、そんな事情なんですかい。数日中には、何とかしてあげますぜ。何もかもうまく行きやすよ。」

「……連絡がつく方法があるんでしたら、父におっしゃってくださいませ。父の愛と母の名誉が、世界中の富より、私には、大事なんだって。……」(p.54) ⁽²⁵⁾

d) 読みとりをうながす、ひとことの描写

以上の a) b) c) 各項は、劇でも充分、表現可能な事項である。この不幸な令嬢の美しさなどは、舞台上では、一目で伝達可能であろう。しかし、ここでも、小説の機能を活用した、一行

を見逃すことはできない。

ヴォートランはボワレに言う。「何をおどろいているんだ！こんなハンサムな人に、恋愛ざたがあったっておかしくないよ。」

タイユフェール嬢は、おずおずした視線で、若い学生の方をちらっと見た。（p.55）⁽²⁶⁾

これは、先々の読みとりに重要なひとことであり、この場で、読者の興味をそそる。その特徴は、1の場合と同じく、細かな描写にある。舞台の上では、この視線は、この少女にふさわしくない程、あからさまなものでなければ、観客の目に届かない。

3 ヴォートラン自身の謎。

Exposition の場の興味をつなぐ要素として、いままで謎の存在を指摘してきたが、ゴリオについて、多くの秘密めいた雰囲気を持たせようとするのは、ヴォートランである。

a) 作者の描写によるもの。

まず、正統的に、彼は、二頁を費やして描写（p.22－23）された後、新参の下宿学生ラスチニャックの目と耳を通して、その怪しげな生態が描写される。（p.47）

b) 他の作中人物の会話によるもの。

これは、先に Avant scène の説明であげたので省略するが、下男と女中による会話で、彼の金回りのよさが、噂される。

c) 本人の会話で。

彼の場合、この方法による描写がかなり多い。それは、彼自身が、小説のなかで狂言まわしのよう、他の人物の運命に介入する役割をひきうけているからである。

「もし、わしが、ここにいたら、あんたは、そんな不幸な目に逢わなかったのにな！」と、その時ヴォートランは、言ったものだ。「その女ベテン師の化けの皮をひんむいてやったのに。わしは、そいつ等^{ツラ}の面には、詳しいんでね。」（p.32）⁽²⁷⁾

彼はまた、前述のように、タイユフェール嬢の運命にも介入できることをほめかしているし（p.54－55）、パリの社交界の裏にも通じているところを披露している。（p.58）

しかし、この、a) b) c) 各項をみればわかるように、これらの手法は、すべて劇において

表現可能なものである。ただ不思議なのは、バルザックが実際に『ヴォートラン』という劇をつくった時、この興味津々たる謎を積みあげる方法をとらず、ヴォートランは、ただ、昔の子分のところに突然現れて、命令する（一幕五場）。おそらく作者は、ヴォートランがすでによく知られていることから、観客の既知力に依存したと思われる。これも劇でのこの人物を紋切り型にした一因だとおもう。ヴォートランの本領は、運命の神のように、他の人間に介入するところにある。何者かもわからず出沒する面白さを抜きにしては、魅力は半減する。他の人物との細かいからみが、その要素の一つであり、小説では、つねに守られたこの原則が、劇では殆ど不可能であったと推測できる。小説では、ちょっと一言のべて、読者の意識に瞬時、出現するということが可能だが、舞台では、その具体的全存在が持続されるからである。丁度、Deus ex machinaが姿をあらわすより、台詞でその恐れが語られるだけの方が印象が強いのおなじである。

他にミショーとボワレの一組も、どうなるのか、軽い興味を添えていて、これは、昼食の場の直ぐ前に、おかみと女中の会話で語られている。（p.50）

以上、Exposition の場を “intéressante” にするために、用いられた手段として、まず謎があること、それが、どんな手段で、どんな風に、積み重ねられているかを検討した。特に、劇では不可能な効果を一言にまとめてみると、それは、複雑化と、細密化、だと言える。この場に集中している謎は、4種類、7人の人物に関わっている。既に指摘したが、これを耳から聞いて心にとめることは、劇では不可能である。その表現については、微妙で、とても舞台上から視覚に訴えることの不可能なものがあつたことは、その都度述べた通りである。とりあげた *texte* の魅力のひとつは、この微妙に表現された複雑な謎を読者の心にあらかじめ織り込んでおき、昼食の場に一挙に集中して、会話のドラマを実現する場にしていることだと言えよう。

Ⅲ、人物間の関係と性格描写

「Exposition は、主要人物すべての性格、利害関係を、告げねばならない。」 (*La dramaturgie classique*) (28)

次に、Exposition の場の重要な要素として、各人物のからまりが、巧みに説明されることが望ましい、とされている。この場面では、それが性格描写とあいまって、どんな風に創られているかを見てゆきたい。

ところで、先述した謎の項で、ラスチニャックに謎がなかったことは、どう解釈すればよいであろうか？ 一応ここでは、『ゴリオ爺さん』は、彼の眼を通して描かれた小説だという定説に援けを求めよう。もしそうだとすれば、本人について謎が存在しないのは頷けることである。

しかし、このことは、小説の細部がすべて彼の視点で描かれていることを意味するわけではないし、すべての場面で彼が主役を演じるわけではない。Exposition の場とみなした昼食の場面で、人物の関係の中心になっているのは、下宿の女主人を別にすれば、どうみてもヴォートラン

である。「船も、海も、フランスも、外国も、事業も、人間も、事件も、法も、ホテルも、監獄も、何もかも知っている。」(p.22) ⁽²⁹⁾しかも、「自分を取り巻いている人のことは、知っているか、でなければ、見抜くことができるのに、自分の考えや、やっていることは、誰にも見抜かせない」(p.23) ⁽³⁰⁾この人物は、その性格からして、この場面の会食者全員に係わり、からまりを巧みに構成するのに最適の役者だといえよう。

そもそも彼は、昼食の場面のはじまる前、お膳立てを手伝いながら、いわば、この場に入り込んでいる。金払いのよさと相まって、女主人から特別な親しみを獲得している。どんな境遇でも、楽々と生きる彼の性格が、細部において描写されている。例をひとつだけあげれば、ラスチニャックの語る謎の貴婦人の話に示したゴリオの反応をみて、「思った通りだね。とヴォートランは身をかがめて、ヴォーケール夫人に耳うちした」(p.56) ⁽³¹⁾などがある。

更に、事ある毎に会話に介入する彼の態度は、その性格の別な一面を表現する。と共に会話相手の性格を浮彫りにする効果を、同時に果しているのである。好適な例をあげてみると、上流社会に対する彼の野心に丁度よいカモになるタイユフェール嬢との、ちょっとしたやりとりで会話は、我々に多くのことを教えてくれる。昼食がまさに始まろうとする時、不幸な娘にヴォートランは、援助をほのめかす。ここで次の物語を導く、ひとつの係わりが成立するのであるが、同時に作者は、この人物の性格描写を巧みに挿入している。

ヴィクトリーヌは、潤んだ、と同時に燃えるようなまなざしをヴォートランに投げたが、彼は心を動かされた様子もない。……「父の酷薄を少しでも和めて下さるのでしたらわたくし、あなたの為に神様に祈りますわ。きっと感謝しますわ。」

ヴォートランは、「長らく、世の中わたった俺は…」と皮肉な声でくちずさんだ。(p.55) ⁽³²⁾

ふとした言葉にも、信仰の片鱗をのぞかせる乙女と、信仰とは最も縁遠い人間の対比がこれ程、わずかな言葉で表された場合は少ない。特にヴォートランの反応は、舞台上で実現するのは、不可能である。

次のラスチニャックとの会話も卓越した作者の能力を例証するものである。勢いこんで、話を始めた青年に、駄洒落で口をはさんで、話の腰を折るところである。洒落があるため原文だけ引用するが、この介入は、ラスチニャックとの決闘という次のからまりを用意するだけでなく、ひとことの描写もない相手（ラスチニャック）の不快感を読者に想像させ、共感させる。

——Hier j'étais au bal chez madame la vicomtesse de Beauséant……où je me suis amusé comme un roi……

——Telet, dit Vautrin en interrompant net.

—— Monsieur, reprit vivement Eugène, que voulez-vous dire?

—— Je dis telet, parce que les roitelets s'amusent beaucoup plus que les rois. (p.55)

その他、前述した講釈など、この学生との言葉のやりとりによる係わりは多い。

さらに、点景人物にすぎないような、ボワレとも、ヴォートランは、「何をおどろくんだ、古帽子」(p.55) ⁽³³⁾などと、会話でかかわりを持っている。わずかな発言であるが、ボワレは、ひとの言葉を繰り返す癖で面白い効果をこの場にそえている。

ミシヨノ嬢とについても同じことが云える。ヴォートランの話に強い関心を示す描写で、作者は、この老嬢を的確に描いている。

(老嬢は、彫刻像をみる修道女のように眼をふせた。) (p.58) ⁽³⁴⁾

ゴリオに対しては、この哀れな老人をヴォートランは、絶えず揶揄の対象にし、ちょっかいをだす。ラスチニャックから、娘の話を聞こうと夢中な老人が、自分の考えだけを追っているのが印象的である。

R「……ところがだよ！ 今朝、九時頃、その気高い伯爵夫人が徒歩でグレ街を歩いてるのに出遇わしたんだよ。もう胸がどきどきして、もしかしたらあの人は……」

V「あの人は、ここへ来ていたんだよ。……お前の云ってる伯爵夫人は、アナスタジー・ド・レストーという名で、エルデル街に住んでいる。」

この名を聞いた学生はヴォートランを見つめた。ゴリオ爺さんが急に頭をあげて、話している二人を、きらきらと不安そうな目で、見やったが、その目付きは、下宿人たちを吃驚させた。

G「クリストフは間に合わない！……」と、苦悩にみちてゴリオは叫んだ。 (p.56) ⁽³⁵⁾

こうして、ヴォートランを中心に人物の動きを見てきたが、この間に他の人物同士の会話も活発にすすみ、日常の些細な動作や言葉が人物の性格全体を浮かびあがらせ、実に自然にすべてのかわりを構成しながら、次の動き（この場合はラスチニャックとヴォートランの決闘）へと、つないで、Expositionの場の機能を完了しているのである。

これを劇『ヴォートラン』における、性格描写と比較してみよう。

例えば、第三幕三場に、ヴォートランと三人の子分の会話がある。子分たちが、反抗し、結局、ヴォートランに押さえられて、協力を誓う場である。大事な主人（ヴォートランが保護しているラウル）のお伴をしながら、昔の癖で、金品をくすねるのをヴォートランに咎められて、彼ら

は文句たらたらである。

L「ああ！そう！なら、一寸ばかり楽しむのも、いけないってんですかい？ちえっ、ジャック、お前さんは……」

V「何だと？」

L「いや、ヴォートランさん、貴方は、……三万フランであの若いのが、王様暮らしをするように、お望みなんでしょうが。わしらは、外国政府みたいに、借金とクレジットで、やっているといるんですよ。金を取りに来る連中みんなから、巻き上げてるってのに、あんたは、御不満なんだから！」

絹糸（子分）「わしは、文なしで買い物に行って、市場から金を持って帰るのが、もういけないと云うんなら、この仕事、降りますぜ。」

哲学者（子分）「とに角、そのために怒られるんなら、……」

絹糸「どうやってやりくりをするお積りで？」（p.194）⁽³⁶⁾

この調子で続くのだが、三人の子分の個性は、少しも弁別できない。またひとりひとりのヴォートランとの関係も区別されていず、小説の下宿人の面白さには、はるかに遠い。

作者はまた、小説で巧みに行ったように、他の人物の言葉で、登場人物の性格描写を試みている。しかし、舞台では、チップを幾らくれるといった細部の描写は無理で、どうしても紋切り型は、避けられない。

V「あの夫妻の評判はどうだね？ 台所で、お前たちの間では、」

J（公爵夫妻の召し使い。Vの昔の子分）「奥方は、まさに聖女さまですよ。」

V「かわいそうにな！ で、公爵の方は？」

J「利己主義者でさ。」

V「ふむ。政治家だからな。……」（p.143）⁽³⁷⁾

更に、先にあげたような、「彼は心を動かされた様子もない。」（p.55）というようなヴォートランの描写になると、これを舞台で表現することは、不可能に近いだろう。

第二章 老若の対決

以上の検討で、小説の集団場面を魅力あるものにしていた会話の技法は、本質的に劇とは、異なっていること、しかし作者はこの違いを充分意識していなかったらしいことが、確認できたか

と思われる。

この章では少し観点を変えて、扱われたテーマを軸に、劇の一場面を検討し、テーマの点で、対応していると思われる小説の場面と対照してみたいと考える。

というのは、ヴォートランが、自分の分身のように、美青年を保護して世に送り出し、上流社会での野心と夢を実現しようとするテーマは、『ゴリオ爺さん』では、ラスチニャックにたいする失敗として描かれ、劇『ヴォートラン』では、ラウルとの関係として取り上げられており、更に、『幻滅』と『浮かれ女……』で、リュシエンを得て発展させられていると云えるからである。

結論を先に云うと、劇におけるこの二人の場面は、第一章であげた劇と小説の相違を、逆に利用して、成功した場合の例ととることができ、その意味でこの章は、第一章の確認、追証の役を果たすものとなるだろう。

さて、二人の関係の基礎になるヴォートランの野心を、彼自身の言葉で、確認しておこう。これは、劇としての失敗の典型のような台詞である。

第三幕四場で、ヴォートランは、今までの生き方、かけた希望を語る。

「ずっと十二年間も根回しをして来てあと数日でラウルに素晴らしい地位を獲得してやれるのだ。…あいつが、俺のために、俺の忠告のままに、俺には入ることが許されない、この上流社会を征服して、あいつ自身で栄光に輝いて欲しいのだ。ラウルは俺の心の息子、俺の骨肉というだけじゃない。あいつは俺の復讐なのだ。……」⁽³⁸⁾と、実に34行にわたる長台詞がある。これは、第一章にあげた彼のちょっとした言葉や、配膳を手伝うといった日常の動作の表現力の傍らでは、まさに解説にすぎないことが理解されよう。無論、こういう内容とこういう言葉は、小説にも存在していることは、第一章で見た通りである。問題は、これが、長い長い独り言である点である。作者が小説で可能なことを、そのまま劇に流用した時、どんな滑稽なことが起こるか、そのよい例になるようなものである。しかしながら、劇作家バルザックの無能を証明するようなこの場面のおかげで、これから検討する、ヴォートラン対ラウルの場面は、小説において、*Avant scène* に助けられた傑作場面と同じ準備を観客の心に獲得することができたのである。その意味で、第二章の、老若対決のテーマを検討する前に、もう一度目を通しておいたことは、無駄ではなかったと思われる。

さて、問題の対決の場というのは、三幕十場。ラウルの恋に気づいたヴォートランが、今まで自分が青年に与えた恩顧の数々をあげ、誠意のほどをあらわして、すべてを自分に打ち明けるよう、求めるところである。この場面を、魅力的になし得た条件は、さしあたって三つあげられる。それは、そのまま、前章で小説の会話を支えた条件であることを再度、予め指摘しておこう。

1 読みとりの完成。

いままで、小説において、とりあげた会話場面には、それに先立って *Avant scène* と言うべ

きものが置かれていて、読者の理解が準備されていることを指摘してきた。劇の場合これがおおむね不可能であったことから、劇『ヴォートラン』のExpositionの場は、不自然で不要な解説で荒頭無稽なものになることが多かった。しかし、注意してみよう。劇もこの対決の場面のように、三幕十場までくると、観客は、ふたりが何者かということもわかっていて、ラウールの恋も、彼がどんな立場にいるかも既に了解済みである。そこで、彼がヴォートランに心を打ち明けるよう急かされての躊躇、恐れと信頼、要するに、この場を味わうのに必要な心のひだの全てに同化することができるのである。

R「あんたには、どうにもできないことだよ。」

V「何でもできる人間が二種類いるんだよ、お前。」

R「どんな？」

V「王様、これは、法の上にいるし、いなきゃならん。…それから……お前は腹を立ててるだろうが……法の下をかいぐる罪人さ。」

R「で、あなたは、王様でない。…とすると？」

V「だから！ 俺は、下を支配しているのさ。」（*o.p.cit.* p.216）⁽³⁹⁾

といった簡潔なやりとりでも、観客の理解が得られるし、ラウールが躊躇いながらも、助けを求めていく過程も理解できるのである。

R「あなたは、年寄り過ぎて、こんなこと言ってもわかってくれないよ。あんたに言うことはないんだ。」

V「ちゃ、俺がお前にいってやろう。イネスが好きなんだね。……」（*Ibid.* p.218）⁽⁴⁰⁾

2 会話のドラマ性。

これだけの状況準備が整っている時には、この場のふたりの心の葛藤は、十分鑑賞可能になる。ここには、いままでの献身のすべてをあげて、ラウールに心を打ち明けるよう懇請するヴォートラン、

「僕は、悪魔の手の中にいるのか？ それとも天使の手なののか？」（217）⁽⁴¹⁾

と惑いながら、「父親と思ってほしいと頼んでいるんだよ。……」（215）⁽⁴²⁾と説くヴォートランの熱意にほだされていく心の動きがそれだけで劇を構成している。

また、彼の支持を得て、ストーリー全体がどう進むかという期待も、集中されるようになっていて、条件がそろっているといえる。

3 性格描写

これらの台詞はまた、ふたりの人物の性格を活写している。ヴォートランについては、ラウールへの偏愛を。

「何処で？ 何時のことだ？ 男の血にかけて！ 誰に侮辱されたのだ？ 誰がお前に礼を失したのだ？ 場所を言いなさい、そいつらの名を言いなさい？ 俺の怒りが駆けつけてやる」
(*Ibid.* p.216) (43)

その理由も垣間見せてくれる。

「ああ！この美しい若さの持つ、高邁の心を眼の前にして誰が冷淡でいられよう？ なんと勇気ももえたっていることか？ さあさあ、大いなる感情よ、駆けろ！おお！ お前は、高貴な血筋の子だ。な、ラウール、俺が正しいと呼ぶものは、これなんだよ。」 (*Ibid.* p.217) (44)

ラウールについては、若さの激情と思い切りのよさを。

R (絶望の余り)「僕は兵隊になるよ。大砲の轟くところ、栄誉ある名を得るか、戦死するかだ！」

V「へん、何のことだ、ガキっぽいことを！」 (*Ibid.* p.218) (45)

V「どんなことにも後退りしないな？ 魔術も地獄も怖くないな？」

R「地獄へだって行け！それが僕に（恋の）天国を与えてくれるんなら！」 (*Ibid.* p.221) (46)

次の台詞は、彼の自尊心の強さをよく示している。

R「僕は言っただろう、何も受け入れないぞと、もし僕の名誉が……」

V「それは大事にするよ。お前の名誉はな。……」 (*Ibid.* p.222) (47)

またしっかりした判断力もある。

R「この男をつくるのに、神と悪魔が共謀したんだ！」

V「あり得ることさな。」 (*Ibid.* p.215) (48)

R「この男の大胆さには、度胆を抜かれる。しかし彼はいつも正しい。」（*Ibid.* p.222）⁽⁴⁹⁾
わずかな例であるが、簡潔に人物を表現していることは、明らかなと思われる。

以上の三点、前もってこの場に集中すべきドラマの準備が完成していること、そのため、簡潔な台詞で登場人物の性格も生き生きと描かれていること、心の葛藤とその顛末の動きが、うまくこの場に案配されていて、それに立ち会えること、の条件は、まさに小説において、会話場面を面白くしていたものに他ならない。このことは、バルザックが、ふたりの人間の対決場面というような、くっきりした型で演じうる場面で、しかも、よく知られているキャラクターを登場させている時には、舞台でも成功を収めうるという可能性を示している。

そして恐らく実際にこの場は、かなり評判がよかったのではないだろうか？ 何故なら作者は、『幻滅』の第三部、ヴォートランとリュシエンの出会いと、『浮かれ女盛衰期』のふたりの対決場面に、この経験を活用しているように見えるからである。バルザックの場合は、「劇が小説から借りた以上に、多くの要素を小説に提供している。」という、R.Guise の指摘と、この劇が、『幻滅』第一部と第二部の間に書かれた事実を考えあわせるなら、大いにあり得ることと思える。それでもなお、小説のこの二場面、劇から影響を受けたに違いないこの二場面が、劇にはない特徴を拡大しているように思われる。少し紙数をさいて、劇との対照において、注意をひく三点にまとめつつ検討してみよう。

二場面のうち、『幻滅』の方は、ヴォートランの世界観と青年との関係を、『浮かれ女…』の方は、青年の恋とヴォートランのもくろみとの衝突を主題としている。こうして劇では、ひとつにまとまっていた二つのテーマを作者は、物語の異なる時期とし、異なる小説に描いたのである。

1) 詳細の相違

最初に問題となるのは、『幻滅』の第三部も終わりに近い部分、自殺しようとしているリュシエンを、神父に変装してパリへむかう途中のヴォートランが救う場面である。誰でも気がつく事であるが、先あげた、ヴォーケール館の昼食の場や、劇『ヴォートラン』三幕十場に比べて、小説のこの場は、非常に長いということである。大体人物の会話、特にヴォートランの会話だけで成立しているような場面なのであるが、それは、p.701からp.726まで実に25頁にわたっている。その中にヴォートランによって語られる挿話がふたつと、人生訓めいた講釈がひとつ、という風にとっても劇では、実現できない方法がもちいられている。この長いひとり台詞の設定は、しかし作者によって詳しく説明されており、対話者ふたりは、馬車の休息を利用して、道中の草のなかを歩きまわったり、腰をおろしたりしている。この長さは、自殺までしようとした一人の人間の心の変化を導くには、必要な長さであろうし、作者は、劇では、ほんの一言しかふれ得なかったヴォートランの青年への関心の理由を詳しく描きたかったに違いない。

リュシアン（自殺の理由を訊ねられて）「貧困です。」

神父は、微笑してリュシアンを眺めた。そして限らない優しさと、ほとんど皮肉な微笑み方をしながら言った。「ダイヤモンドは、自分の値打ちを知らないものです」（p.705）⁽⁵⁰⁾

この例でも感じられるように、微妙な心理の動きは、小説でなければ、表現できない。更に、地の文の極く短い解説と共に、ラスチニャックの実家を見物するといった、解説なしの人物の行動描写によってバルザックは、彼の作中人物の心の動きを詳細に伝えている。

2) 衝突する個性の強弱

ラスチニャックによって夢を実現する提案を断られたヴォートランにとってリュシアンは、その代替物であることは、よく言われることである。

この関係を念頭において、劇と小説の人物をくらべると、次のような図になる。

ラスチニャック > ラウル > リュシアン

>印は、意思や精神の強さの度合いを示している。ラウルは、ヴォートランに従いながらも、自尊心や、感情について譲らないという点で、ふたりの同類の真ん中に位置している。そこで結果的に次のようなことになる。小説の二場面（つまり青年は常にリュシアン）では、ヴォートランの強い意思が一方的に力を行使して、烈しいぶっかかり合いは、見られない。『幻滅』では、リュシアンは、まさに死の淵から連れ戻されたばかり、金貨の波に目も眩んで、「神父さま、私はあなたのものです。」（p.726）などと言っている⁽⁵¹⁾。

『浮かれ女…』では、最愛の愛人を売って資金を手にいれようというヴォートランの提案に、結局は、逆らえない。

「エステルを売るんだって！」とリュシアンは、叫んだ。そんな彼の最初の反応はいつも素晴らしいものだった。

「お前、俺たちがどんな羽目になってるか忘れたのか？」とカルロス・ヘルラ（ヴォートラン）は大声を出した。

リュシアンは、頭を垂れた。（p.97）⁽⁵²⁾

恋心はあってもすべてに弱いこの性格は、次の会話でもよく寸描されている。

L「……でも、もし、ヌッシンゲンが、エステルより、あの女の方を好んだら？」

V「そらそら、おいでなすった。」とカルロスは叫んだ。「あんなに昨日、嫌がってたのに、今日は、それが実現しなかったらと心配してる。」（p.159）⁽⁵³⁾

3）ドラマ性の欠如

これらのことから、上の二つの小説における、ヴォートランと青年の対決は、意思と意思のぶつかり合い、真の対決とならず、ただヴォートランの、神や悪魔を模したような強い意思の実現の場となり、その意味で劇的な緊張を欠くものとなっている。『ゴリオ爺さん』で彼とラスチニャックの間に交わされる短いやりとりが、たちまち、^{ドラマチック}劇的な緊張を醸し出すのと正反対である。

「おわかりかな？ ラスチニャコラマ侯爵、今の言葉は、まさしく丁寧とはいえませんが。」とヴォートランは、サロンの扉をびしっと打つて、学生に詰めよって来ながら言った。こちらは、すこしも動じずに、相手を見返した。彼は、食堂の戸を閉め、ヴォートランを階段の下に連れていき……「ムッシュウ ヴォートラン、僕は侯爵ではない、ラスチニャコラマという名でもない。」（p.116）⁽⁵⁴⁾

また実際、先の二場面は、第一章で取り上げた場面のように、放射線状の人物の糸を、一点にまとめて会話場面をつくるといった要の場ではない。『幻滅』の方は、何故リュシアンが、ヴォートランの被護を受けるに至るか、^{カナメ}をながながと描き、『浮かれ女…』の方は、エステル^{カナメ}の苦悩と純愛を描いていて、物語のいわば、つなぎの部分である。

しかしながら、明確な強い線で描かれた、ふたりの典型のかわりに、細かく、意思の弱い詩人を描いたことによって、小説は、劇では表現できないような、ひとつの陰影にみちた個性を創造し得ている。

こうして、以上の比較は、第一章の結論を逆方向から裏づけたものだと言えるだろう。劇に必要な、くっきりとした、キャラクターを登場させるとき、そして、すでにその内部をかなり理解できるような、準備が、観客のなかに行き亘っている時には、バルザックの劇は、強烈な劇的緊張を可能にするということ。ただし、それは、人物の表現をかなり簡潔にし、やや紋切り型にするので、ヴォーケール館の食事場面のような、精密、複雑な現実感、のぞめないし、集団の会話よりも、ふたりの人間の対決の場に適したものになると言えよう。

結 論

『ゴリオ爺さん』の冒頭を飾る、ヴォーケール館の集団の会話場面は、確かに劇でいう Exposition の場としての資格を十分に備えていると言うことが出来た。人物は巧みに紹介され、個々の性格も利害のからまりも、その各々の秘める謎を孕みつつ、読者の興味をこの上ない魅力で惹きつけながら、描かれていた。

同時にこの時、駆使された技法を分析してみて、小説の会話が、劇とは違って何なの？ という問いに答えることができたと思われる。

まず第一にそれは、文字で表現されることによって、読者の想像に大幅な選択権を与えているということである。読者は、自分で場面を構成することが出来るために、或る人物を前面に、他の人物をぼんやりと、という風に濃淡自由に意識することが出来る。時には人物を黙殺することも可能である。指標の選択と、その組み合わせによって、錯綜した綾糸を、一点に集中させ、劇とは異質なドラマ性が獲得される。これは、身体を持つ俳優によって、全部が同じ強度で視覚されざるを得ない舞台と全く異なる。

第二の特徴は、人物の関係の複雑さと、言葉や地の文による表現の細かさである。バルザックの小説も、劇と比較すると、その精緻な心理描写に驚かされる。極端な例は、「～しなかった」という、否定語の描写に明瞭に見られるであろう。

第三には、すでに前稿で指摘したことであるが、微妙な説明を用いて、あらゆる方向に伏線を張り巡らしておき、主要場面で、一挙に読者の心に収斂させ、^{ドラマチック}劇的な瞬間を形成する特徴である。

三点をまとめると、関係の複雑さと、描写の精密さ、錯綜した伏線の瞬間的集約ということになり、それをささえているものは、自由な視点の選択であり、文字で書かれた言葉は、その不可欠な条件であった。

以上が、本稿の結論であるが、これら幾つかの結果は、ただひとつの原因に行き着く。小説における会話場面の舞台は、存在しない、ということ。…それは、個々の、無数の読者の意識の中に構築されるのみであるということ、である。

その世界では、いかなる細部の表象も可能であり、いかなる視点の移動も可能である。複雑な関係の糸を操って、過去に遡り、未来を予感し、時間という流れのドラマの中に場面を集約することもできる。その、存在しない影像是、際限なく精緻でもあり得るし、部分的にアップも、パンもできる。小説の会話は、本質的に劇の会話ではなく、表象によって支えられているという意味で、現実の会話でもない。この会話の持つ特権を劇にそのまま移行させようとした時、バルザックは、あれほどよく知っていた魔法の、呪文を失ったと言える。

劇は、文字を失うことにより、この体系全体を失う。舞台は、凡てを観客の目に、同じ強度で曝し、自由な想像の世界を許さない。バルザックの劇場面で、唯一成功したように思えるのは、もしそれを小説に描いたとしても、想像が限定される場面、—— 関係が単純で、細部の影像是不要であり、それ以上に、対比と衝突が求められる場面——すなわち、二人の強烈な（紋切り型の？）人物の対決の場面であった。これは、小説の会話が、その凡ゆる特権を放棄した場面だとも言えるであろう。

ところで劇の言語は、これとは異質な数々の特権を持っていないわけではない。バルザックは、小説の会話は熟知していたが、劇でそれに代わるべき言葉—— 発声されて耳から入ってくる言葉、俳優の動く肉体という重い現実をひきずっている言葉—— 劇特有の言語の在り方を、認識していなかったというべきであろう。

註 の 部

- (1) 「小説における会話」(8), *études françaises*, 36, 1991
- (2) Textes としては下記を使用
H. de Balzac, *Le Père Goriot*, Edition P.G.Castex, Classiques Garnier, 1963
Illusions perdues, Edition A.Adam, Calssiques Garnier, 1963
Splendeurs et Misères des courtisanes, Edition A.Adam, Classiques Garnier 1964
Oeuvres complètes illustrées, publiées sous la direction de J-A.Ducorneau,
Paris, les Bibliophiles de l'originale, 1965-1976, vol.21-23; Théâtres, p.p. René Guise
- (3) "P.Barbérís l'a remarqué 《Spontanément, Balzac..pense en terme de théâtre..Il voit des scènes qu'il essaie ensuite grouper》" Balzac, *Oeuvres complètes*, vol.21, p.XXVIII
- (4) *Vautrin, drame en 5 actes*, version définitive, H. de Balzac, *O.C.*, vol.22, p.131-279
- (5) "La pièce fournit plus d'éléments au roman qu'elle ne leur emprunte," *Ibid*, p.645
- (6) "Une exposition complète, selon l'auteur du manuscrit 559 de la Bibliothèque Nationale, doit instruire le spectateur du sujet et de ses principales circonstances, du lieu de la scène et même de l'heure où commence l'action, du nom, de l'état, du caractère et des intérêts de tous les principaux personnages", J.Scherer, *La dramaturgie claaistique en France*, Nizets.d., p.51
- (7) *Ibid*.
- (8) — Silvie, dit Christophe en mouillant sa première rotie, monsieur Vautrin, qu'est un bon homme tout de même, a encore vu deux personnes cette nuit. Si madame s'en inquiétait, ne faudrait rien lui dire.
— Vous a-t-il donné quelque chose?
— Il m'a donné cent sous pour son mois, une manière de me dire : "Tais-toi." p.47
- (9) La Duchesse, "Ah! vous m'avez attendue, combien vous êtes bonne!"
Mlle de Vaudrey " Qu'avez-vous, Louise? Depuis douze ans que nous pleurons ensemble, voici le premier moment où je vous vois joyeuse : et pour qui vous connaît, il y a de quoi trembler" (Acte I, scène II, *op.cit.* p.136)
- (10) En 1674, il paraît bien démodé à Boileau, qui se moque de ces tragédies où le héros décline son nom "Et dit : Je suis Oreste, ou bien Agamemenon." (*Art poétique, chant III v.34*) J.Scherer, *op.cit.* p.59
- (11) "Elle(exposition)n'est ni vraisemblable ni intéressante quand un personnage raconte à un autre des événements que ce dernier ne peut manquer de connaître déjà" *Ibid*. p.57
- (12) En ce moment la sonnette se fit entendre, et Vautrin entra dans le salon en chantant de sa grosse voix :
*J'ai longtemps parcouru le monde,
Et l'on m'a vu de toute part...*
— Oh! oh! bonjour, maman Vauquer, dit-il en apercevant l'hôtesse, qu'il prit galamment dans ses bras.
— Allons, finissez donc.
— Dites impertinent! reprit-il. Allons, dites-le. Voulez-vous bien le dire? Tenez, je vais mettre le couvert avec vous. Ah! je suis gentil, n'est-ce pas?
Ibid. p.51-52
- (13) "...Vous êtes encore trop jeune pour bien connaître Paris.." *Ibid.*, p.58
- (14) "... (A ces mots, mademoiselle Michonneau regarda Vautrin d'un air intelligent. Vous eussiez dit un cheval de régiment entendant le son de la trompette.." *Ibid.*, p.58
- (15) Récit de Thérémène, Acte V, Scène VI, de "*Phèdre*"

- (16) P.Larthomas, *Le Langage dramatique. Sa nature, ses procédés*, A.Colin, 1972 も同意見である。
Deuxième partie, chap.1, *La prosodie*
- (17) “L’Exposition, affirme l’auteur de ce manuscrit, doit être entière, courte, claire, intéressante et vraisemblable” J.Scherer, *op.cit.*p.56
- (18) Poiret offrit son bras à Mademoiselle Michonneau...
— Eh bien! les voilà donc quasiment mariés, dit la grosse Sylvie.Ils sortent ensemble aujourd’hui pour la première fois..*op.cit.*p60
- (19) Le père Goriot lui répondit que cette dame était sa fille aînée.
— Vous en avez donc trente-six, des filles? dit aigrement madame Vauquer.
— Je n’en ai que deux, répliqua le pensionnaire avec la douceur d’un homme ruiné qui arrive à toutes les docilités de la misère.
- (20) et qui vaut mieux qu’eux tous. Il ne donne pas grand’chose; mais les dames chez lesquelles il m’envoie quelquefois allongent de fameux pourboires, et sont joliment ficelées.
— Celles qu’il appelle ses filles, hein? Elles sont une douzaine.
— Je ne suis jamais allé que chez deux, les mêmes qui sont venues ici.
- (21) — Mais, dit Rastignac, qui se trouvait assez près de Bianchon... Eh! eh! voyez donc comme le père Goriot examine mademoiselle Victorine.
Le vieillard oubliait de manger pour contempler la pauvre jeune fille dans les traits de laquelle éclatait une douleur vraie, la douleur de l’enfant méconnu qui aime son père.
— Mon cher, dit Eugène à voix basse, nous nous sommes trompés sur le père Goriot. Ce n’est ni un imbécile ni un homme sans nerfs.
- (22) Deux figures y formaient un contraste frappant avec la masse des pensionnaires et des habitués.
- (23) Mademoiselle Taillefer avait à peine écouté,tant elle était préoccupée par la tentative qu’elle allait faire.
- (24) — Ah bah! Ils sont tous sortis. Madame Couture et sa jeune personne sont allées manger le bon Dieu à Saint-Etienne...
- (25) — *O femmes innocentes, malheureuses et persécutées*,s’écria Vautrin en interrompant,voilà donc où vous en êtes? D’ ici à quelques jours je me mêlerai de vos affaires, et tout ira bien.
— Oh! monsieur, dit Victorine en jetant un regard à la fois humide et brûlant à Vautrin, qui ne s’en émut pas, si vous saviez un moyen d’arriver à mon père, dites-lui bien que son affection et l’honneur de ma mère me sont plus précieux que toutes les richesses du monde.
- (26) — Eh bien! pourquoi vous en étonneriez-vous, vieux chapeau? dit Vautrin à Poiret. Monsieur est bien fait pour en avoir.
Mademoiselle Taillefer coula timidement un regard sur le jeune étudiant.
- (27) — Si j’avais été ici, lui disait alors Vautrin, ce malheur ne vous serait pas arrivé! je vous aurais joliment dévisagé cette farceuse—là. Je connais leurs *frimousses*.
- (28) “du caractère et des intérêts de tous les principaux personnages”→ note(6)
- (29) Il connaissait tout d’ailleurs, les vaisseaux, la mer, la France, l’étranger, les affaires, les hommes, les événements,les lois, les hôtels, et les prisons.
- (30) Il savait ou devinait les affaires de ceux qui l’entouraient, tandis que nul ne pouvait pénétrer ni ses pensées ni ses occupations.
- (31) — J’ai deviné, dit Vautrin en se penchant à l’oreille de madame Vauquer.
- (32) — Oh!monsieur, dit Victrine en jetant un regard à la fois humide et brûlant à Vautrin,qui ne s’en émut pas,...Si vous obteniez quelque adoucissement à sa rigueur,je prirais Dieu pour vous. Soyez sûr d’une reconnaissance..

— *J'ai longtemps parcouru le monde*, chanta Vautrin d'une voix ironique.

(33) note (26)

(34) (La vieille fille baissa les yeux comme une religieuse qui voit des statues)

(35) Eh bien! ce matin j'ai rencontré cette divine comtesse, sur les neuf heures, à pied, rue des Grès.
Oh! le cœur m'a battu, je me figurais...

— Qu'elle venait ici... Votre comtesse se nomme Anastasie de Restaud^e, et demeure rue du Helder^f.

A ce nom, l'étudiant regarda fixement Vautrin. Le père Goriot leva brusquement la tête, il jeta sur les deux interlocuteurs un regard lumineux et plein d'inquiétude qui surprit les pensionnaires.

— Christophe arrivera trop tard, elle y sera donc allée^g, s'écria douloureusement Goriot.

(36)

LAFOURAILLE.

Ah ça, l'on ne peut donc pas s'amuser un peu? Que diable! Jacques, tu veux...

VAUTRIN.

Hein?

LAFOURAILLE.

Vous voulez, Monsieur Vautrin, pour trente mille francs, que ce jeune homme mène un train de prince? Nous y réussissons à la manière des gouvernements étrangers, par l'emprunt et par le crédit. Tous ceux qui viennent demander de l'argent nous en laissent, et vous n'êtes pas content.

FIL-DE-SOIE.

Moi, si je ne peux plus rapporter de l'argent du marché quand je vais aux provisions sans le sou, je donne ma démission.

PHILOSOPHE.

Enfin, si c'est pour ça que vous vous emportez...

FIL-DE-SOIE.

Comment entendez-vous tenir votre maison?

(37)

VAUTRIN.

Que pensez-vous d'eux, à l'office, entre vous?

JOSEPH.

La duchesse est une sainte.

VAUTRIN.

Pauvre femme! Et le duc?

JOSEPH.

Un égoïste.

VAUTRIN.

Oui, un homme d'état.

- (38) Après douze ans de travaux souterrains, dans quelques jours j'aurai conquis à Raoul une position souveraine: il faudra la lui assurer. Lafouraille et Philosophe me seront nécessaires dans le pays où je vais lui donner une famille. Ah! cet amour a détruit la vie que je lui arrangeais. Je le voulais glorieux par lui-même, domptant, pour mon compte et par mes conseils, ce monde où il m'est interdit de rentrer. Raoul n'est pas seulement le fils de mon esprit et de mon fiel, il est ma vengeance.

(39)

RAOUL.

Tu ne peux rien.

VAUTRIN.

Enfant, il y a deux espèces d'hommes qui peuvent tout.

RAOUL.

Et qui sont?

VAUTRIN.

Les rois, ils sont ou doivent être au-dessus des lois... Et tu vas te fâcher? les criminels, qui sont au-dessous.

RAOUL.

Et comme tu n'es pas roi?

VAUTRIN.

Eh bien! je règne en dessous.

(40)

Raoul.

Tu t'es fait trop vieux pour pouvoir comprendre, et ce n'est pas la peine de te le dire.

Vautrin.

Je te dirai donc. Tu aimes Inès de Christoval,...

(41)

Raoul.

Suis—je entre les mains d'un démon ou d'un ange?

(42) ... Je t'ai prié de m'adopter pour ton père, ...

(43)

VAUTRIN.

Où! Quand? Sang d'un homme! qui t'a blessé? qui t'a manqué? Dis le lieu, nomme les gens? la colère de Vautrin passera par là!

(44)

VAUTRIN.

Eh! qui resterait froid devant la générosité de cette belle jeunesse? Comme son courage s'allume! Allez, tous les sentiments, au grand galop! Oh! tu es l'enfant d'une noble race. Eh bien! Raoul, voilà ce que j'appelle des raisons.

(45)

RAOUL.

Eh! le puis-je? Je me ferai soldat, et... partout où grondera le canon, je saurai conquérir un nom glorieux, ou mourir.

VAUTRIN.

Hein!... de quoi? qu'est-ce que cet enfantillage?

(46)

VAUTRIN.

Tu ne recules devant rien? la magie et l'enfer ne t'effraient pas.

RAOUL.

Va pour l'enfer, s'il me donne le paradis.

(47)

RAOUL.

Je dis que je n'accepte rien, si mon honneur...

VAUTRIN.

On en aura soin, de ton honneur!

(48)

RAOUL.

Dieu et Satan se sont entendus pour fondre ce bronze—là!

(49)

RAOUL.

Son intrépidité m'épouvante; mais il a toujours raison.

(50) (リュシアン、自殺の理由を尋ねられて) — La pauvreté.

Le prêtre regarda Lucien en souriant et lui dit avec une grâce infinie et un sourire presque ironique : — Le diamant ignore sa valeur. (*Illusions perdues*)

(51) — Mon père, je suis à vous, dit Lucien ébloui de ce flot d'or. (*Ibid.*)

- (52) — Vendre Esther? s'écria Lucien dont le premier mouvement était toujours excellent.
— Tu oublies donc notre position? s'écria Carlos Herrera.
Lucien baissa la tête. (*Splendeurs et Misères des Courtisanes*)
- (53) — Mais si Nucingen la préférait à Esther...
— Ah! te voilà venu...s'écria Carlos. Tu as peur aujourd'hui de ne pas voir s'accomplir ce qui t'effrayait tant hier! (*Ibid.*)
- (54) — Savez-vous, Monsieur le marquis de Rastignacorama, que ce que vous me dites n'est pas exactement poli, dit alors Vautrin en fouettant la porte du salon et venant à l'étudiant qui la regarda froidement.
Rastignac ferma la porte de la salle à manger, en emmenant avec lui Vautrin au bas de l'escalier,...— Monsieur Vautrin, je ne suis pas marquis, et je ne m'appelle pas Rastignacorama. (*Le Père Goriot*)

(1991. 9. 17 受理)